

# フアルスは証言する

——坂口安吾「風博士」論——

宮 澤 隆 義

一 はじめに

過去に何か事件が起こったという絶対的な事実があり、それに対する形で現在時において物語が進められてゆくといういわゆる古典的な形式を持った探偵小説においては、なんらかの推理が最終的には事件の真相を明かすという、通時的に整序されるべきプロットの存在が重要になる。だがここで、もしも事件の存在を告げる証言者しかおらず、探偵が事実を明かすという筋書きなしに話が進んでいったら、一体どうなってしまうのだろうか。坂口安吾の「風博士」（「青い馬」、一九三二年六月）は、言葉遊びの中にもそのような探偵小説的な道具立てを用意しつつ、解説者たる探偵を持たないという意味できわめて滑稽で奇妙な効果を生みだしている作品である。どうやらそこでは「風博士」なる人物が「消失」したということについて述べられているらしいのだが、事件がそもそも本当に起こった事なのか、また語っているのは何者なのかよくわからないままに語りが進行してゆくのだ。例えば佐々木基

一のように「風博士の正体は何であろうか」と問うたとしても、そこに残されているのは「記録」だけなのである。<sup>(2)</sup>

そのような作品に対しては主にどういったことが語られてきたのだろうか。「風博士」に関する先行研究をみると、奥野健男による「理解するのではなく、感じればよい」という宣言を嚆矢として、関井光男による「グロテスクなもの」<sup>(3)</sup>、あるいは仏教思想との関連における宗教的理解や性的な比喩との関係づけなどがなされてきた。その多くは、物語中のモチーフを隠喩的に解釈し、そこから作家論的な意味を見出している。そこでは、例えば安吾作品において「風」とは何を意味するか、あるいは「風博士」「蛸博士」「花嫁」といった表現がどのようなモチーフの隠喩かということが争点となってきた。安吾の作品の多くは人物や筋を性格的写實的に描くというよりも、アレゴリー的に描いているという指摘はしばしばされてきたが、これらの論は、「風博士」が持つとされる「謎」を、まさに読み解くべき寓意としてとらえていると言える。

それに対し、隠喩的読解は恣意性を免れないとして、作品の構造的な面から読解を行なおうとする研究の向きが出現した。花田俊典の論は、この作品の道具立てから一種の探偵小説的な観点を割り出し、それらを用いてウィットに富んだ解説を行なった。花田は、「語り手」の「僕」が実は「蛸博士」であるとも読めることを指摘し、事件の謎解きという面を強調する。そこには、「風博士」の作品世界の中で「事件はすでに起きてしまつて」（傍点花田）おり、「風博士」の物語はそこからはじまるとする認識がある。だが花田の問題意識は、最終的には「風博士」をどう読み解くかは、たぶんもつと多様に可能はず」と述べた点にある。それは、「風博士」が単純な二項対立に回収されることなく「多様に可能」な読解を誘うものだという主張であった。

また、加藤達彦は、「風博士」という「物語」は「読者」と「僕」との関係に収斂する点を強調し、「風博士に正体などありえない」とした。だがそこから、「僕」という人物が存在し、風博士と蛸博士との闘争の物語を語るに叙述するという行為自体は疑い得ない」として、唯一「最後の一文によるこの破壊された構造だけは破壊されない」という点を指摘している。さらに、佛石欣弘はそれらの視点を引き継ぎながらも、この話は「僕の語り」と「風博士の遺書」では言及している「事実」が異なっており、「事実」を確定することもできないよう構築されているため、「風博士」の意味は、その構造上、読者ひとりひとりに委ねられ、唯一の「事実」は確定できない」と述べた。そこでは、個々の「読者」が物語を構築せざるを得ない作品としての「風博

士」、というテーマが描きだされている。また、内倉尚嗣は全く異なる角度からだが、「風博士」は「一つの謎の解決がまた新たな謎を生む仕組みになっているかのよう」に見える」と示唆している<sup>(8)</sup>。

しかし、ここで必要だと思われるのは、そのように「風博士」をめぐって「多様」な「読み」が発生するのであれば、その発生の条件について考察してみることではないだろうか。というのも、ファルス (Fals) としての「風博士」の孕む問題は、そのような解釈へ至る以前に、読解を可能にしながらも常にそれに抵抗するものとして見出される、「言葉」の経験と伝達の問題を表現しているところにあるのではないかと思われるからだ。本論はそのような観点から、「風博士」における「言葉」に注目して考察を行つてみたい。

## 二 証言する言葉

無名の安吾を文壇的に紹介することになった、牧野信一による「風博士」評価の一文は、話の内容よりも、むしろ作品内で用いられている言葉について注意して見る必要があることを指摘している。

厭世の偏奇境<sup>ベロナ</sup>から発酵した<sup>ア</sup>とつもないおし<sup>ト</sup>しゃべり<sup>ン</sup>です、これを読んで憤らうつたつて憤れる筈もありますまいし、笑ふには少々馬鹿くし過ぎて、さて何としたものかと首をかしげさせられながら、だんだん読んで行くと重たい笑素に襲はれます。「中略」読んでいくうちに何だか得体の知れない

信用を覚えさせられて来るのです。「中略」私は、フアウスタスの演説でも傍聴してある見たいな面白さを覚ええました。奇体な飄逸味と溢る、ばかりの熱情を持った化物のやうな弁士ではありませんか。

「とてつもないおしゃべり」、「フアウスタスの演説」や「化物のやうな弁士」という比喻によつて、『風博士』が過剰なまでのレトリックによつてつくられてることから、牧野は修辭が引き起こす「信用」という問題について注目していたことがわかる。

「ナンセンス」さを積極的に受けとめた牧野のこの評言は、作品内の言葉の効果に注目しているという点で興味深いものだ。というのも、『風博士』はこの時期における安吾の作品の多くがそうであるように「諸君」への呼びかけからはじまつており、それは修辭が、他者へと呼びかける言語活動であることと関連するからだ。

諸君は、東京市某区某町某番地なる風博士の邸宅を御存じであらう乎？ 御存じない。それは大変残念である。そして諸君は偉大なる風博士を御存知であらうか？ 御存知ない。それは大変残念である。では偉大なる風博士が自殺したことも御存じないであらうか？ ない。嗟乎。では諸君は遺書だけが発見されて、偉大なる風博士自体は杳として紛失したことも御存知ないであらうか？ ない。嗟乎。では諸君は僕が其筋の嫌疑のために並々ならぬ困難を感じてゐることも御存知ないであらうか？ 於戲。では諸君は僕が偉大なる風博士の愛弟子であつたことも御存じあるまい。しかし警察は知

つてゐたのである。そして其筋の計算に由れば、偉大なる風博士は僕と共謀のうへ、遺書を捏造して自殺を装ひ、かくてかの憎むべき蛸博士の名譽毀損をたくらんだに相違あるまいと睨んだのである。諸君、これは明らかに誤解である。

この「諸君」への呼びかけは、「風博士」の「紛失」に関する、「警察」が「僕」にかけた容疑に対しての弁明として述べられている。しかし既に先行論文で指摘されているように、ここで語られている「事実」のほとんどは「僕」の言葉によつて告げられている以上、事件の存在自体が「僕」の説明以外に根拠を持たない、不確定なものとしてしか提示されない。それゆえ、「僕」の言葉を聞く「諸君」なる立場もまた、「警察」と同様に、事件の実際については無知な存在として「僕」の言葉を聞く存在である、ということになる。「諸君」と「警察」とは、「僕」の言葉に対する受け手として、「僕」の話を「信用」するか否かという問題においては同等の立場に置かれているのである。

ここでの「警察」の推論は、「僕」の言葉を偽のものとして疑いながら、その真の動機を読解する存在として描かれていると言えよう。「其筋の計算に由れば」、言葉以前に「共謀」があり、行為以前に「たくらんだ」意図が存在しているのだ。つまりここで「警察」とは、言葉の流れからプロット（＝陰謀）を再構成することで欲望の次元における行為の真の主体をつくり出そうとする、解釈者の役割を代行していると言えよう。まさに「警察」としては「犯罪と犯人とは「中略」世界の見失われた部分に相当している」のであり、ここで「警察的知はその欠落を再構成し

て、世界の全体性を回復してやらなければならない」役割を担うことになる。

そのような「警察」の容疑に対して「容疑者＝証人」としての「僕」は、「常のみずからについて語り続け」、「現実と想像、確かなものと不確かなもの、真と偽の混然とした流れを作り出す」言葉を吐き続けることになる。そもそも、「僕」のひとり語りによつて説明されるという形をとるこの作品は、その大部分が「風博士」の身に起こった事件についての証言として書かれているとみなせるだろう。だが、これらの証言はとてつもなく胡散くさい（そのことがこの作品の喜劇性をつくり出している要素のひとつだ）。だがこの滑稽さには、証言ということに関するひとつの本質が描きだされている。それは、証言の内包する問題は、もはや出来事が眼前のいまここに存在しない時に、そのことが起こったということを示さなければならぬ、ということだ。さらにこの冒頭部分においては、そもそも「僕」なる存在すらも、「諸君」には「御存知ない」言語上の存在として提示されており、ここで描き出されているあらゆる情報は、言語の効果としてしか受けとることができないものとして散りばめられていたことを想起しよう。

何となれば偉大なる風博士は自殺したからである。果して自殺した乎？ 然り、偉大なる風博士は粉失したのである。諸君は軽率に真理を疑つていいのであらうか？ なぜならそれは、諸君の生涯に様々な不運を齎らすに相違ないからである。真理は信ぜらるべき性質のものであるから、諸君は偉大なる風博士の死を信じなければならぬ。そして諸君は、か

の憎むべき蛸博士の——あ、諸君はかの憎むべき蛸博士を御存知であらうか？ 御存じない。噫吁、それは大変残念である。

「僕」の証言は、指示対象を特定できないにも関わらず、話自体は言葉の指示行為に対する「信」によつて進んでゆく。牧野が指摘した「得体の知れない信用」とは、ここに書かれている人物の行動やら事件やらが事実だということに対する「信用」ではなく、むしろ発話が持つ力、それが指し示す行為を認めるという意味での「信用」なのである（この意味で、まず私たちはここに物語や登場人物が描かれているという観点自体をも疑つてみる必要があるのだ）。

### 三 「可能の世界」が示すもの

そこからすると、確かにこの作品には、安吾自身が「二十七歳」（新潮、一九四七年三月）において「風博士」の頃の作品を振り返つて述べたように、「文章があるだけ」なのだとと言えるだろう。しかしそれを逆に考えれば、「文章があるだけ」という状態において、言葉を経験するということがまさに「風博士」において描かれていたテーマだったと言える。実際、一九三〇年代からその文芸誌における執筆活動を開始したと言うことができる（<sup>14</sup>）。例えば、坂口安吾の自伝風作品である「二十一」（現代文学、一九四三年九月）では、言葉が「神経衰弱を退治」するために勉強されていた。

外国語を勉強することによつて神経衰弱を退治した。目的を

きめ、目的のために寧日なく、りきり、意識の分裂、妄想を最小限に封じることが第一、ねむくなるまでいつまでも辞書をオモチャに戦争継続、十時間辞書をひいても健康人の一時間ぐらゐしか能率はあがらぬけれども、二六時中、目の覚めてゐる限り徹頭徹尾辞書をひくに限る。梵語、パリー語、チベット語、フランス語、ラテン語、之だけ一緒に習つた。おかげで病氣は退治したが、習つた言葉はみんな忘れた。

この文章は安吾が二二歳の頃、すなわち一九二七年前後のことに ついて回想的に書かれたものだが、ここからは、「言葉を用いる」という行為が、通常想定されるような意味を共有しうる伝達行為とは異なり、神経衰弱からの治癒という用途で勉強されていたことが読みとれる。またこの時期の直後に発表されている、ファルスと呼ぶことができる作品としては、「木枯の酒倉から」〔言葉〕、一九三一年一月、「寛博士の魔類」〔作品〕、一九三二年一月、「金談にからまる詩的要素の神秘性に就て」〔作品〕、一九三五年七月などを挙げることができるが、いずれの作品においても、「言葉」はそれぞれなんらかの意味で重要なファクターとなっているのだ。例えば「木枯の酒倉から」においては「瑜伽行者」から「詩と現実」についての問答をふっかけられ、「寛博士の魔類」では主人公の名前に「坂口アングウ」といった言葉遊びが描き込まれており、「金談にからまる詩的要素の神秘性に就て」では、主人公の弁護士が「借金の言訳」を語りたおしている、といった言語遊戯はそれらの作品の特徴である。

ここで特に「風博士」における言葉の問題との関連として、安吾が同年に発表している「村のひと騒ぎ」(三田文学、一九三三年一月)を取りあげておきたい。「村のひと騒ぎ」の大まかな筋は、婚礼当日に葬儀をしなければならなくなったとある村の人々がその不都合に頭を悩ませるが、医者が発言により死者の死亡を一日延期することになって丸くおさまるといふ話である。その死者を生きていると言いくるめる医者(の台詞には、「風博士」における断定的な台詞などと比較した際の共通性が指摘できる。

「みなさん! しづまりたまへ! 不肖医学士が演壇に登りましたぞ! 医学士が登壇したからしづまれ! 安心なさい! (と斯う叫んだが、実は本当の医学士ではなかつたのである)」「中略」不肖は、医学士であるから、不肖の言葉は信頼しなればならん。そこで(と、彼は一段声を張りあげた)医学の証明するところによれば、寒原家の亡者は一日ぶん生き返つたのである! (と、斯う言われた聴衆は彼の言葉を突理に理解することができなかった) 諸君! 偉大極まる医学によれば、人には往々仮死といふことが行はれると定められてある。「中略」亡者は一日ぶん生き返つた! お通夜は明晩まで延期しなければならんのである!

ここでは、「亡者は一日ぶん生き返つた」ということが、言葉の意味よりも、その効果においてとらえられている。そしてこの物語の最後には、この話を見聞して感激したという「東京で蒼白い神経の枯木と化していた私」が登場し、物語に対する注釈的な感想を述べる。それによると、彼はその直後に村を訪ね、実際の村

の現状がそのような騒ぎにふさわしい場ではなく、「私達の見飽いた人間」ばかりがいることを目撃しつつも、最後に彼は以下のように述懐する。「そこで諸君は考へる。「中略」あの物語はあり得ない、あれは嘘にちがひないと。断じて！断々乎として！あれは確かに本当の出来事だ！「中略」それ以来といふものは、あれとこれと、どちらが本当の人生であるかといふに、頭の悪い私には未だにとんと見当がつかないでゐる。ああ。この言葉においては「嘘」と「現実」という対立が問題とされておらず、むしろ言葉が呼び起こす「本当の出来事」なるものが重要視されていることがわかる。

この、言葉上の「出来事」という問題は、この時期の安吾の他のエッセイにも散見されるテーマである。例えば「現実主義者」〔文芸通信〕、一九三六年五月」というエッセイは、「伝達された事件」というテーマを扱っている点において「風博士」との類縁性が指摘できるだろう。そこで安吾は、新聞報道で騒がれる「実子殺し」や「若妻殺し」といった事件に対し、「写実主義」と「現実」という概念を混同して事件を直ちに「描破せよ」と説く「当今有名な一批評家」を批判しつつ、文学の役割についてこう述べている。

小説の世界にありましては、それが実際に何時起らうと起るまいと、実子殺しも実父殺しも若妻殺しも、そも／＼人間と共に已に可能でありました。〔中略〕

あらゆる行為が錯乱が分裂が已に人間と共に可能だつた。そして人間の行動はその現実には於てはむしろ浪漫的非

現実的であつたが、勝れた文学に於てのみ真に現実的であり我々はそこに人間を発見したといふ、これは単なる逆説でせうか？人間の現実とは小説の亜流だといふことも私は信ぜずにおられませんか。

この「逆説」が述べていることは、現在の事件の原因として過去があるのではなく、出来事の性質は可能的な想定の際から考えられるべきであり、「文学」は「人間の現実」に起こる事件に対して、それが存立するためのアプリオリな「可能性」の条件を提示する表現として位置づけられる、ということとして換言しよう。つまりここで「殺し」という事件は、実際の殺人としてではなく、いわば時間性とは無関係な出来事としてとらえられている。

常識的に考えると、ある事件はその原因となるべき「過ぎ去つた現在」としての過去において発生したととらえられるはずだろう。だがここでは、通常の因果関係においては「過去」が占める位置が、「可能」なそれへと変換されているのだ。<sup>[15]</sup>それゆえ、「人間能力の可能の世界に於て、凡ゆるる翼を揚げきつて空騒ぎをやらかしてやらうといふ」安吾のファルスにおいては「Falscheに就て」『青い馬』、一九三三年三月）、探偵小説的な過去の事件の解釈モデルとは相容れない要素が出てくるのは必然なのである。送り手も受け手も不明なままに漂流する『風博士』の言葉においては、証言は事件を証明しなければならぬにもかかわらず、継起的な時間の秩序からは外れたものとして構想される「可能の世界」においてそれを表現してゆくのだ。証言はその性質上、真実に送り返される保証を持たない指示を避けることができないので

ある。だがそれゆえに、逆説的なことだが、証言において「可能」なものへとなされるアプローチを描きだすことによつて、「事実」の「現実」性を示唆する必要性が、ファルスをめぐる問題においては語られている。先の「村のひと騒ぎ」において述べられていた、「本当の出来事」として示された審級は、「可能なもの」の表現としての証言においてのみ、「事実」が「伝達」されるものとして機縁を持つ、ということについて告げているのだ。

#### 四 「目撃者」の使命

「風博士」に戻ろう。そのような事態についての言及は、たとえば「風博士の遺言」においても延々となされていることが見出されるだろう。

諸君、彼は禿頭である。然り、彼は禿頭である。禿頭以外の何物でも、断じてこれある筈はない。彼は髪を以て之の隠蔽をなしおるのである。ああこれ実に何たる滑稽！ 然り何たる滑稽である。ああ何たる滑稽である。〔中略〕

諸君、余を指して誣告の誹を止め給へ。何となれば、真理に誓つて彼は禿頭である。尚疑はんとなせば諸君よ、巴里府モンマルトル Bis 三番地、Perruquier ショオブ氏に訊き給へ。

今を距ること四十八年前のことなり、二人の日本人留学生によつて髪は剃られたることを記憶せざるや。一人は禿頭にして肥満すること豚児の如く愚昧の相を漂はし、その友人は黒髪明眸の美青年なりき、と。黒髪明眸なる友人こそ即ち余で

ある。見給へ諸君、ここに至つて彼は果然四十八年前より上げてゐたのである。

「遺言」とはその性格上、発話主体とは切り離された形で自らの執行力を持つ文章であると言えよう。それは発話者の不在の状況において、その意志を実現しようとする。「風博士」もまた「僕」と同様に、彼の言葉において意味されるものが存在したということを確認しようとして試みているが、実際のところ彼が述べていることは、「バスク開闢」についてのいわゆる偽史であつたり、

「髪を以てその禿頭を瞞着せんとする」とされる、「風博士」の正体暴露に失敗（「蝟博士」が本当に禿頭だったのかも定かではない）した経緯についての話ばかりである。ここでは証言と遺言は構造的に共通があるものとして描かれている。しかしそのような問題をはらみながらもそれらの言葉は、内容の荒唐無稽さに関わらず、なんらかの呼びかけとして受けとられることになり、たとえその結果が「無視」というものであつたとしても、行為を触発するという意味においては自らを「伝達」と言うこともできるだろう。『風博士』は構成上、「風博士の遺言」から「僕」への呼びかけ、「僕」から「諸君」への呼びかけ、「風博士の遺言」から「諸君」への呼びかけなど、様々な形で言葉が投げかけられあうことによつて、錯綜した形で証言が他の証言を呼ぶという構造になつて<sup>17</sup>いる。その証言を受けとつた者は、自らの言葉が常に謗言である恐れに取り憑かれながらも、証言を他者へ語り継ぐことを止めることができなくなる様がそこでは描かれていると言えよう。そこでは「風博士の遺言」を受けとつた「僕」のように、呼

びかけを聞いた者が、その呼びかけを経験した「目撃者」として、「出来事」にとり憑かれてしまうのだ。

そのような証言というモメントは、「僕」が「博士」の「自殺」について述べるくだりにおいて最も明示的になるのだが、「僕」はそこで、「目撃者」としての叙述をはじめている。

諸君は偉大なる風博士の遺書を読んで、どんなに深い感動を催されたであらうか？　そしてどんなに劇しい怒りを覚えられたであらうか？　僕にはよくお察しすることが出来るのである。偉大なる風博士はかくて自殺したのである。然り、偉大なる風博士は果して死んだのである。極めて不可解な方法によって、そして屍体を残さない方法によって、それが行はれたために、一部の人々はこれは怪しいと睨んだのである。ああ僕は大変残念である。それ故僕は、唯一の目撃者として、偉大なる風博士の臨終をつぶさに述べたいと思ふのである。

事件に対して目撃者がただ一人しかいないとすれば、その者はその出来事が起こらなかったのではなく、起こったのだということ自体についてまず証言しなければならぬ。しかしここでも過去に関する証言は、その対象が時間とともに消え去ってしまうために、必然的に指示対象から離れてしまう。「僕」の台詞のなかでは「博士」の「紛失」という「事件」の詳細について、こう述べられている。

已にその瞬間、僕は鋭い叫び声をきいたのみで、偉大なる博士の姿は蹴飛ばされた扉の向ふ側に見失つてゐた。僕はび

つくりして追跡したのである、そして奇蹟の起つたのは即ち丁度この瞬間であつた。偉大なる博士の姿は突然消え失せたのである。

諸君、開いた形跡のない戸口から、人間は絶対に出入しがたいものである。順つて偉大なる博士は外へ出なかつたに相違ないのである。そして偉大なる博士は邸宅の内部にも居なかつたのである。僕は階段の途中に凝縮して、まだ響き残つてゐるそのあわただしい音を耳にしながら、ただ一陣の突風が階段の下に舞ひ狂ふのを見たのみであつた。

「風博士」は「戸口」から「外に出なかつた」と同時に「内部にも居なかつた」。しかし、それを「目撃」している「僕」は、「風博士」の消失を「内部」からとらえることしかできていない。それゆえ、「風博士」を読むということは、他に「目撃者」がない状態で起こつた、他者に伝達不可能な経験についての証言を聞くという、「伝達」行為に内在する問題を描きだしている。言葉が証言として現れる際には、言葉が修辭的な問題をはらみながら浮かび上がることによって、証言する行為自体が要請し、指し示す「可能の世界」が問題となるのである。この証言性の問題は、言葉自体へも適用されることになる。

## 五 未来への「再生」

諸君、偉大なる博士は風となつたのである。果して風となつたか？　然り、風となつたのである。何となればその姿が消え去せたではないか。姿見えざるは之即ち風である乎？



然り、之即ち風である。何となれば姿が見えないではない乎。これ風以外の何物でもあり得ない。風である。然り風である風である風である。諸氏は尚、この明白なる事実を疑るのであらうか？ それは大変残念である。それでは僕は、さらに動かすべからざる科学的根拠を付け加へやふ。この日、かの憎むべき蛸博士は、恰もこの同じ瞬間に於て、インフル、エンザに犯されたのである。

「風博士」の最終部分はこのようにして、落語を連想させるようなオチで締めくくられている。それは「蛸博士」が風邪をひいたという洒落だ。「風」という語と、「インフルエンザ」という語は、文字通りには異なる単語である。この洒落を了解するには、いったん「カゼ」という音へと移行が行なわれないと、意味的に異なる二つの単語がジョークにならない。このような音との接合は、「POPOPOO!」「TATATATATAH!」といった「叫び声」や「あわただしい発音」、また直前の「風である風である風である」といった反復において準備されていたとも言えよう。この「カゼ」という音は、作品そのものには明記されていない言い換えの行為として、異なる言葉のオーダー（文字と音）同士の接続が起されることを示している。このユーモラスかつアイロニカルな結末は、「言葉」と呼ばれるものがこのようにいくつもの要素を意味しうるのと同様に（文字も音も「言葉」と呼ばれる）、「風博士」と呼ばれる存在もまた、様々な異質な諸要素（風、ウィールス、言葉……等々）によって成り立っていたことを告げている。「風博士」は、「インフルエンザ」と連接されることに

おいて、その言葉をなりたたせることが「可能」な、かつ異質なものとしてのその要素のひとつによってこそそれ自体も明らかにされるのだ。<sup>18)</sup>

そもそも、「風博士」で起こっていたとされる諸々の出来事は、「伝達」行為において出来事に接続される、それ自身とは異質な要素によってはじめて示されるのだと言える。証言としての「伝達」とは、他者との接続において出来事が前提としていた可能性を展開させ、転化させることによって出来事をとり憑かせてゆく行為なのである。「諸君」への呼びかけは、証言の持つそのような作用を示そうとしている。このような問題は、安吾の文章論にも見出すことができる。

小説の部分々々の文章は、それ自らが停止点、飽和点であるべきでなく、接続点であり、常に止揚の一過程であり、小説の最後に至るまで燃焼をつづけてゐなければならぬと思ふ。燃焼しうるものは寧ろ方便的なものであつて、真に言ひたいところのものは不燃性の「あるもの」である。

（文章の一形式「作品」、一九三五年九月）

「伝達」における「接続」によって出来事はほとんど分裂していくことになるが、伝達の一つ一つは出来事に「可能なもの」として伏在していた異質性の表現としてあらわれることになるのである。そのような思考をたどることで、例えば「未来のために」（読売新聞、一九四七年一月二〇日）において織田作之助の「可能性の文学」やジツドについて触れながら、安吾が次のように述べていることの意味が判明になるだろう。

まことの文学は、常に、眼が未来へ向けられ、むしろ、未来に對してのみ、その眼が定着せらるべきものだ。未来に向けて定着せられた眼が過去にレンズを合せた時に、始めて過去が文学的に再生し得るのであつて、単なる過去の複写の如きは作文以外の意味はない。

「未来」と接続されることによつてはじめて、「過去」が「再生」する。このような考え方は、過去の事件が現在をつくりだすという因果関係を規準とした時間概念から、安吾が逸脱している点と関連しているだろう。「僕」は「風博士」の存在とその消失という事件について証言しようとしているが、そのような出来事は、証言の経験において自らを碎き撒き散らすことによつてこそ、その持つ特異性を指し示すのである。つまりここに逆説があるのだが、出来事の還元不可能性は、異質なものとして自らを表現することにおいてのみ、はじめて自らを「伝達」するので。「風博士」の消失とそれに関わる証言の経験は、そのことを告げていると言へるだろう。

(注一) 内田隆三「探偵小説の社会学」(岩波書店、二〇〇一年)も指摘するように、エルンスト・ブロッホ「探偵小説の哲学的考察」(『異化』所収、船戸・守山・藤川・宗宮訳、白水社、一九八六年)にせよ、スラヴォイ・ジジエク「斜めから見る」(鈴木晶訳、青土社、一九九五年)における探偵小説への言及にせよ、ジャック・デュボア「探偵小説あるいはモデルニテ」(鈴木智之訳、法政大学出版局、一九九八年)にせよ、この「殺人」という起源の謎を解くというモチーフにおいて、探偵小説とオイディプス物語(そしてしばし

ば指摘されてきた、同時代的な精神分析の勃興)を重ねている。ただし、「風博士」にはそのような整序されるべきプロットが決定的に欠如しているのであり、そのことが本論にとつては興味深い。

(2) 「坂口安吾」(『群像』、一九五一年一月)

(3) 「坂口安吾」(文藝春秋、一九七二年)

(4) 「道化の意匠」(関井光男編「坂口安吾の世界」、冬樹社、一九七六年)

(5) 「風博士」解説——あるいは靖博士の奸計」(『語文研究』第六六・六七号、一九八九年六月)

(6) 「破壊」された物語——坂口安吾「風博士」論——(『日本文芸論稿』第二号、一九九五年二月)

(7) 「坂口安吾「風博士」論——その構造が指し示す「ファルス」の「読者」に就いて」(『近代文学論集』第二八号、一九九八年)

(8) 「風博士」試論——ヘナンセンスの陥穽——(『日本文藝研究』第四七卷第三号、一九九五年二月)

(9) 「風博士」(『文藝春秋』、一九三二年七月)

(10) 佐藤信夫も安吾の言語面について、「風博士」は「中略」全編これ修辭なのだ」と指摘している(『坂口安吾とことば』「ユリイカ」、一九八六年一〇月)。ただし佐藤の場合は、「風博士」のようなファルスという「落伍者の文学」を「幼稚な裏がえしのダンディズム」として、否定的な評価に留めている。

(11) 前掲注(4)、(5)を参照。

(12) 桂秀実「探偵のクリティック」(思潮社、一九八八年)。前節で挙げたいくつかの先行研究にもし問題があるとすれば、「謎」が「不確定性」なものであると述べる際に、このような解説者の役割に自らを振り当てざるを得ないところにあるように思われる。だがそれらの読解は、「風博士」がその言葉の乱舞のうちに差し出している、言葉の経験を抑圧した上でなりたっている問題提起なのではないだろうか? 安吾が推理小説というジャンルからではなく、まずはファルスという非常に奇妙なジャンルの言表行為を記すことから

作品を書きはじめている、ということを問うてみる必要があるように思われる。

(13) 前掲注(一)中、デュボア。

(14) 安吾は、その名も「言葉」というタイトルの雑誌をアテネ・フランスの同人(葛巻義敏、長島幸、若園清太郎ら)とともに一九三〇年一月に創刊しており、彼の周辺のグループでは「言葉」についての何がしかの問題意識が共通していたことがうかがえる。

(15) 安吾の時間概念については、拙稿「ファルスの詩学——坂口安吾と「観念」の問題——」(坂口安吾研究会編『坂口安吾論集Ⅱ 安吾からの挑戦状』ゆまに書房、二〇〇四年)においても論じた。この安吾の時間観は、彼の自伝的作品や、歴史観とも緊密な関係を持つていると思われる。またちなみに、後出の「未来のために」における「未来」とは、安吾における「新らしさ」という語と密接な関係があるように思われる。

(16) 小林真二は「風博士」論——小谷部全一郎の戯画化をめぐる——(『日本近代文学』第五九集、一九九八年一〇月)で、この「義経Ⅱ成吉思可汗」説が「戯画化」される際に、安吾のアテネ・フランス通学や諸外国語の学習体験と関連させながら、言語に対する関心が安吾に作用していた可能性について触れている。

(17) 前掲注(5)の佛石論文は、「風博士」の「構造」とは、「作

品」と「読者」の関係を、「風博士の遺書」と「僕」の関係として予めプログラムしたものと云える」と述べている。

(18) このような、言葉における異質な要素間の接続は、たとえば作品冒頭部で繰り返される「嗚乎」「嗟乎」「於戯」という表記変換などにも描きだされていたと言える。この作品のそこに見出される言葉の「遊び」は、もし潜在的なアナグラムの次元にまで遡及すれば際限なく拡張されうることになるだろう。そこからすると、「風博士」のあらゆる個所が意図せざるこれらの言葉遊びに感染している可能性があるとする見ること、全くの不可能ではない。言葉遊びを前提のひとつとしているであろうファルスにおいては、一旦読解された語のなかにも、言葉の別様の接続の可能性が回帰してくることを常に妨げることができないのだ。

※

本稿中では混同を避けるため、「風博士」を作品名として、「風博士」を作品内で指示される登場人物の名称として記述した。引用は「坂口安吾全集」(筑摩書房、一九八七―二〇〇〇年)に拠り、ルビは部分的に省略してある。傍点は、特に注記がない場合は引用者による。また、本稿は二〇〇三年度早稲田大学国文学会秋季大会(十一月二十八日)での発表の一部をもとに執筆したものである。貴重なご意見を下さった方々に感謝します。